

徳富蘇峰管見

—透谷論のためのノート—

菊地 宏

一

徳富蘇峰は、「透谷全集」を読む（明・35）の中で「本書中にて最も多く君を説明したる」ものとして「明治二十年八月十八日附石坂ミナ宛書簡草稿」を取り上げ、これについて次のような感想を述べている。

予は之れを一読して、実に意外の感なき能はず。君は其の成立の境遇を以て、甚だ不幸の境遇となしたるものの如し。然も其の語る所を聞けば、殆んど十人の中七八人迄は、有り勝ちの境遇にして、……此れがために、其の一生を犠牲にせねばならぬ程の因縁を生じたる理由は、万々是れある可らず。

要するに、自分の「成立の境遇」をことさら不幸なもの

とする透谷の描写は「其の半は主観的の觀察」にすぎず、透谷を「厄したる者は、家庭にあらず、境遇にあらず」透谷自身に外ならない、という客観的觀察を行なった上で、「其の人に深交なく、復た其の精神的共通を欠く」蘇峰はこう結論する、透谷は結局「余りに純粹」すぎたのだ、「世に通用せしめんには、金貨さへも、他の鉱物を加味するにあらずや」と。

どうしようもないなという思いが先に立ってしまうが、筆を進めるために、蘇峰の二十年代前半の「精神的年代記」であるという「静思余録」の中から、「余裕」という文章を次に取り出しておこう。

余裕なきは、進歩なし。進歩なきは、希望なし。希望なきは、未来なし。人の世に在る、未来なきより悲しきはなし。未来なくして世に在る、是れ生きながら死する

也。……如何にして余裕を存養し得可き耶。……人の精力を消磨するは、労働よりも、寧ろ労働に伴随する思慮是れ也。……思慮の儉約は、猶ほ金錢の儉約の如し。……蓋し思慮の儉約の第一義は、思ふて惑はざるに在り。……その第二義は、死者をして死者を葬らしむるに在り。……その第三義は、未済の事物を想像して、鬼胎を懐く可からず。……その第四義は、己が解釈し能はざる疑問を強いて解釈することなきことなり。……此の四者あらん、……一旦变故あるに際しても、敢て驚慌周章せず、囊中より物を探るが如く、泰然として之に処して、自から措を失ふが如き過りなけん。(明25・6)

△休めよ休めよ、わが時間は迅きこと彼方の峯を駆けまはる電光に似て、……わが物を思ふは恰も秋の蟬の樹に倚りて小息なき声を振り立つるが如くにして／汝が説く詐調の道にて仏となる可き性ならず／自由？これ頑童の戯具のみ！／望？これ老いたる嫗の寢醒の囁言のみ！／といふ『蓬来曲』(明24・5)の柳田素雄の科白を想い起させるような文章であるが、透谷は『静思余録を読む』(明26・6)においては、なぜか、右の文章に次のようなつきあい方をしている。

「余裕」一篇は恰も経験を以て頭を染めたる雪白翁の微笑を含んで小童を教ゆるが如き趣あり、其中に曰く、「人の世に在る、未来なきより悲しきはなし、未来なくして世に在る、是れ生きながら死する也」と。凡そ斯の如き談話的の論文は、其声極めて平らかにして、其調尤も低きも、深く迷巷の民を警醒するものにして、民友子が勢力の淵源するところ、決して偶然にあらざるを知るなり。彼の宗教は斯の如く邇近の地盤の上に立てり、斯の如く邇近の地盤の上に立ちて而して彼の宗教は、悠然人間の真相を透徹し、能く天下の人心を率ゆるの道を踏み、

何がこのように透谷の筆を迂らせるのか。注意深く読んでいくと、『静思余録を読む』の中にも△蓋し彼は其精緻なる哲見に於ては、エマルソンたり、而して、其鋭敏なる批評眼に於ては、マコーレーたり、然れども其根底に於ては、儒教道徳を離るゝ事なし／という一節に透谷の△然れども△を発見することができが、しかしこの△然れども△に続く一行は、『今日の基督教文学』(明・26・4)の蘇峰の項の△然れども彼の所論は何処までも人間の社界に重くして個人的の生命には少しく軽きところなるも免れず△が孤立しているように、孤立していて力が弱い。

だが、考えてみれば、このような孤立した一行こそ時代

の中の透谷そのものではなかったか。否、それはむしろ透谷の書いたものことで、透谷自身は、表現を獲得できない△然れども▽そのものではなかっただろうか。

蘇峰は、その透谷が△生は筆の虫なりと云はれまほしき一奇癖の少年▽であるが△詩文を試みて意想を写す能はざるの時、書簡を認めて所見を述べる事叶はぬ暁、精神鬱快として殆んど人事を忘るゝに至る▽とその冒頭に記していることにはいささかも注意を払うことなく、〃ミナ宛書簡草稿〃を△最も多く君を説明したる▽ものとして取り上げ、透谷の回想を△其の半は主観的の觀察▽にすぎないと評し去る。そして、その△鬱快▽を知らない△精神▽は、次のようにわけもなく△非厭世▽を説く。

吾人は確信す、偉大なる国家を建設せんと欲せば、先づ国民の腔子裏に、一の幸福の念を剗刻せよ。人既に幸福なるを自覺す、元氣淋漓、山をも排く可く、海をも掀ぐ可し。

幸福の念を来すもの、一に曰く天を信ず。二に曰く職分を尽す。三に曰く命に安んず。此三者あり、円満なる祝福恒に我が頭上に在らん。……

人は幸福ならざる可からず、人は幸福なる可き責任を有す。人若し幸福なる能はずんば、是れ自から失墮したる也。天を咎む可からず、人を咎む可からず、是れ自家

の罪なり。既に自家の罪なるを醒覺すれば、一躍以て起つ可し。起つとは何ぞ。天を信ず可し、命に安んず可し、職分を行ふ可し、唯だ此の如きのみ。《非厭世》明・25・9

透谷を名指して△非国民▽呼ばわりしない分だけ、蘇峰の△精神的年代▽も時代もまだ若かったというだけのことであると、今日ならこの文章を読むことができるが、同時代の透谷は、〃静思余録を読む〃では一言もこれには触れていない。勿論、透谷の読者ならば、ここでも△個人的生命に少しく軽きところなるも免れず▽という先程の一行とともに、〃人生に相渉るとは何の謂ぞ〃《明26・2》の次の一節をただちに想起することができるであろう。しかし、このような激しい言葉で戦端を聞きながら、透谷がいわゆる△人生に相渉る論争▽の中で次第に口をつぐんできたという事実を、われわれは同時に想い起さないではない。〃静思余録を読む〃が書かれたのは、左の文章が書かれる前ではなくその後のことなのである。

悲しき Limit は人間の四面に鉄壁を設けて、人間をして、或る卑野なる生涯を脱すること能はざらしむ。鵬の大を以てしても蜩の小を以てしても、同じくこの限を破ること能はざるなり。而して蜩の小を以て自らその小

を知らず、鵬の大を以て自ら其の大を知らず、同じく限に縛せらるゝを知らず欣然として自足するは、憫れむべき自足なり。この憫れむべき自足を以て現象世界に処して、快樂と幸福とに欠然たるところなしと自信するものは、浅薄なる樂天家なり。彼は狭少なる家屋の中に物質的論客と共に坐を同くして泰平を歌はんとす。歌へ、汝が泰平の歌を。

透谷の眼は正確に蘇峰を射貫いている。少なくとも、そのような眼を透谷は確かにもっている。『人生に相渉るとは何の謂ぞ』は、言うまでもなく、直接には山路愛山の『頼襄を論ず』（明・26・1）の冒頭の『文章即ち事業なり。文士筆を揮ふは猶英雄劍を揮ふが如し。共に空を撃つがために非ず為す所あるが為也』以下の一節に触発されて書かれたものであり、論全体のモチーフも、このような『文章』観に対して『文学』といふ女神を守ろうとするところにあるが、『人生に相渉る論争』そのものを扱おうとするのではないこの小論においては、ここではただ、右の一節の中に蘇峰の『自足』を正確に見抜く眼を確認しておけば足りる。

しかし、透谷の眼は正鵠を射ているが、その激しい言葉は、他者を撃つというよりはむしろ『楚囚』の我が身を嘆くもののような響きを伝える。『曾つて誤つて法を破り』

と処女作『楚囚之詩』（明・22・4）の第一行目に書き、『蓬萊曲』の最後の山頂の場面では、柳田素雄に『世のおきて乱し、世のさだめ破るものわが後に生れざれ』と言わせて自死させた透谷は、ここでも、その同じ悔恨の壁に突き当たっているように見える。そして、その壁は透谷の言葉を次のように屈折させる。

思想界には地平線アリス的思想と称すべき者あり、常に人世の境域にのみ心を注め、社界を改良すと曰ひ、国家の福利を増すと曰ひ、民衆の意向を率ゆと曰ひ、極めて尠雑なる目的と希望の中に働らきつゝあり。国民は尤も多く此種の思想家を要す、凡そ此種の思想家なき所には何の活動もなく何の生命もなし、然ども記憶せよ国民は此種の思想家のみを以て甘んずべきにあらざるを。真正のカルチュアを国民に与ふるが為には、地平線アリス的思想の外に、更に一物の要すべきあり。……

吾人は之を高踏的思想と呼ぶ、数週前に民友先生が言はれし高踏派という文字と其意味を同ふするや否やを知らず。吾人は実に地平線アリス的思想の重んずべきを知ると雖……ヒューマニチーを人間に伝ふるは独り地平線アリス的思想の任にあらず、……ヒューマニチーは社会的義務の為めにのみ存するにあらず、……純美を尋ね、純理を探る、世の詩人たり、学者たる者優に地平線アリス的思想家の預り知

らざる所に於て人類の大目的を成就しつゝあるにあらずや。《國民と思想》明・26・7・15)

先程見た△然れども彼の所論は何処までも人間の社界に重くして個人的の生命いのちには少しく軽きところなるも免れず▽の一文と同じ論理がここではより展開された形で現れているが、その先には「慢罵」(明・26・10)の挫折が待ち受けている。否、そういう言い方は正しくない。すでに「蓬萊曲」の最後の場面で△見よや、われを納むべき天は眺みるが内に高きより高きに、蒼きより蒼きにのぼりのぼりて、わが入る可き門かどはいや遠み。／見よやわが離る可き地は、唯だ見る、蛟龍の背そびらを樹つる如く怒濤の湧く如わが方に近寄り近寄り、埋めんとす、呑まんとす、その暗き墟あなに。／琵琶よ汝いましを伴なふて何かせん、汝を頼みて何かせん▽と素雄に語らせ、その自死に先立って△理想と恋人とが凝成したりし者▽||琵琶を△地獄よみの地▽に投げ下させた透谷である。ここで△純美を尋ね、純理を探る▽と書いているその胸の中に、次のような△慢罵▽が重くわだかまっているいはずはない。ただ、それを吐き出してしまえば透谷はもう生きられないのである。そういう△牢獄▽の構造を考えなければ、右の文章は正しくとらえることができないであろう。

今の時代は物質的の革命によりてその精神を奪はれつゝあるなり。その革命は内部に於て相容れざる分子の衝突より来りしにあらず。外部の刺激に動かされて来りしものなり。革命にあらず移動なり。人心自ら持重するところある能はず、知らず識らずこの移動の激浪に投じて、自から殺ろさざるもの稀なり。……斯の如くにして國民の精神は能くその発露者なる詩人を通じて文字の上にあらはれ出でんや。……

汝詩人となれるものよ、汝詩人とならんとするものよ、この國民が強いて汝を探偵の作家とせんとするを怒る勿れ、この國民が汝によりて艶語を聞き、情話を聴かんとするを怪しむ勿れ、……汝等是不幸にして今の時代に生れたり、汝の雄大なる舌は陋小なる箱庭の中にありて鳴らさざるべからず。汝の運命はこの箱庭の中にありて能く講じ能く歌ひ能く罵り能く笑ふに過ぎざるのみ。……汝を囲める現実汝を駆りて幽遠に迷はしむ。然れども汝は幽遠の事を語るべからず、汝の幽遠を語るは寧ろ湯屋の番頭が裸体を論ずるに如かざればなり。……吁、汝詩論をなすものよ、汝詩歌に勞するものよ、帰れ、歸りて汝が店頭に出でよ。

このように△慢罵▽を叩きつけた透谷は、だが△歸りて……店頭に出で▽ることはなかった。「蓬萊曲」の柳田素

雄は、大魔王によってその苦悩と努力からいっさいの現実的意味を奪われながら、大魔王の提供しようとする△穩やかに、樂しき者▽としての生活を拒否して最後の戦いを挑み、△死ぬ可き定にうごめく塵の生命▽の非力を徹底的に思い知らされた後、△世のおきて乱し、世のさだめ破るものわが後に生れざれ▽の言葉を残して死ぬが、その作者である透谷も、三年後にやはり△われは世の破れざるが故に我心を破るを恨む▽△我が事終れり▽の言葉を残して世を去る。しかも、素雄が△地獄の地▽に琵琶を先駆させて死を召んだように、透谷もまた、品川の女郎屋に足を運んで△牙城▽のすべてを放棄した上で自裁する。つまり、透谷は『蓬萊曲』においてすでに自身の挫折の運命を正確に見透していたことになるが、それにもかかわらず、それを自分ではどうすることもできなかったというところに、透谷の悲劇はあった。あるいは、それにもかかわらずなお、素雄がそうであったように、ついに悔い改めようとしなかったというところに透谷の罪と罰はあったと言うべきか。

二

ところで、いずれにしても問題は透谷の△牢獄▽の思想構造をどうとらえるかにあるが、以上のように見てくると、透谷の蘇峰評はきわめて複雑なニュアンスをもつものであることがわかるであろう。透谷と蘇峰という主題について

はこれまでもしばしば論じられてきており、すぐれた実証的な研究も数多く残されているが、管見のかぎりでは、その点の把握は必ずしも充分であるとは言いがたいように思われる。たとえば、比較的最近のものとしては、笹淵友一氏の『北村透谷「内部生命論」』（昭・50・4）がこの主題についてのすぐれた包括的な研究として挙げられるが、その中で笹淵氏は、先程引いた『国民の思想』の文章について△当時の透谷は蘇峰に対しても相当肚を据えてかかって▽いるとした上で、△もちろん地平線思想を無価値などとはいっていない。むしろその世間的意義を認めてさえいる。しかし明らかに地平線思想に対する優越感がある。この内部生命に立脚した、地平線思想に対する優越と承認という微妙な関係を確認することが透谷のオリジナリティを発見する道である▽と述べている。△感覚と印象▽にのみ頼る批評を厳しくいましめ、△印象に客観性を賦与▽する必要を説き、△その客観性は文脈の正確な分析によって可能だ▽とする氏の分析は、ここでも△透谷は蘇峰の平民的、国民的立場の意義を認めながら、彼自身の立場は真正のカルチャーを国民に与えるために「個人的生命」を明らかにすること宣言しているのである▽とあくまでも平明であるが、しかし、このような平明さに対してはわたしはあるもどかしさを禁じえない。もどかしさは透谷文そのものについても感ずるが、しかし透谷文の場合

には、わたしには透谷自身があるもどかしさを抱きながら文章をつづっているように読まれる。ところが、△透谷の意識は内部生命を強調して、社界的生活には冷淡だった▽として、△いうまでもなくそれが民友社との間に論争をひき起した原因である。もしそうでなければ論争など初めから起りようがなかったのである▽と述べる笹淵氏の場合には、そうではない。これも、透谷の△彼の所論は何処までも人間の社界に重くして個人的生命には少しく軽きところなるも免れず▽をひっくりかえただけのように見えるが、少しばかり印象がちがうのである。

△彼の所論は……▽の場合には、前に引いた△この憫れむべき自足をもって現象世界に処して……▽を下に敷いて読めば、△蘇峰の平民的、国民的立場の意義を認めながら……▽とか△透谷は民友社に対して分業意識をもっていた▽とかいうようには必ずしも整理しきれないようなニュアンスをもっており、また「国民と思想」の△純美を尋ね、純理を探る……成就しつゝあるにあらずや▽の場合も、同じ△憫れむべき自足……▽や△慢罵▽の激烈な文章と考えあわせながら読むとき、△優越感▽は必ずしも△明らか▽ではなく、むしろ悲痛な印象を与える。つまり△優越▽も△承認▽とともに簡単には△確認▽しえないのであり、したがって、両者の△微妙な関係▽もさらに微妙な問題を含んでいると考えざるを得ないのである。また、笹淵氏は、

「国民と思想」の△ニュアンス▽を△相当肚を据えてかかって▽いるというような印象でとらえているが、わたしの印象ではむしろ透谷は追いつめられながら△慢罵▽を必死で押し殺しているというように読まれる。勿論「国民と思想」と「慢罵」との間には三ヵ月余の隔りがあるが、前に述べたような理由から、わたしはその時間は両者の関係をとらえる上でなんら重要な意味はもたないと考える。△わが時間^{とき}は迅きこと彼方の峯を駆けまはる電光に似て、わが誕生^{うまれ}とわが最後とは地に近ける流星の火となりて走り下り消え失する暇よりも速く……▽と書いた透谷である。

もっとも笹淵氏の場合は、△地平線的思想に対する優越と承認という微妙な関係▽の中に△牢獄▽の翳を見ないように、△「慢罵」のはげしい社会批判▽の中にもそれを見ないのであるから、これだけでは△印象に客観性を賦与▽したことにほならないのかも知れない。それにしても、△客観性は文脈の正確な分析によって可能だと考え▽る笹淵氏の△文脈の正確な分析▽は、少しばかり平板な印象を与えるように思われるがどうだろうか。△思想史的把握を拒否し専ら印象に信頼しようとする方法に余儀なくされた揣摩憶測、そして不明確さ▽を拒否する氏は、たとえば△「内部生命論」については既に拙著「文学界とその時代」^{インテリゲンチヤ}上所収の透谷論において、伝記と思想の両面から内部生命の觀念がプロテスタンティズム、とくにクエーカーイズ

ムの信仰に根拠をもっていることを詳論した。ただ透谷のキリスト教思想はネオ・プロテスタンティズムであるクーカリズムに傾斜しながら、他面に正統派のカルヴィニズムの影響をも残しており、それが「人生に相渉るとは何の謂ぞ」の自然観の矛盾——汎神論的自然観と原罪的自然観（のニュアンスをもつ思想）との矛盾——として現われていること、更にこの汎神論的自然観は東洋的汎神論とは意識的には一応区別されながらも、混融の傾向をも仄見させていることなどを論証したVという具合に見事に△思想史的V方法を駆使しているが、しかし、わたしはやはり自分の△印象に信頼Vしておいた方が安全だという気がしてならない。『内部生命論』についてはここでは触れる余裕はないが、先程の△牢獄Vの問題に関連して、わたしは、透谷の民衆観の△根底には「人間は罪に生れた」という原罪観があるV（ここでは△（のニュアンスをもつ思想）Vというカッコがついていない。ここで気がついた、というのはいささか迂濶であるが、△思想史的把握Vや△文脈の正確な分析Vにおいて笹淵氏の用いるタームには、あるいは△（のニュアンスをもつ思想）Vが大抵の場合は省略されているのかも知れない。少なくとも、読む側としてはこれを補って読んだ方がより安心だという気がする。』とする氏の考え方にはにわかに同意しがたいように思われる。たとえば、『人生に相渉るとは何の謂ぞ』の△肉の剣はいかは

どに鋭くもあれ、肉を以て肉を撃たんは文士が最後の戦場にあらず、眼を挙げて大、大、大の虚界の視よ、彼処に登攀して清涼宮を捕握せよ、清涼宮を捕握したらば携へ歸りて俗界の衆生に其一滴の水を飲ましめよ、彼等は活きむ、嗚呼彼等庶幾くは活きんかVという非望は、△「人間は罪に生れた」という原罪観Vを△根底Vにしたものであろうか。また、さきほど見た『蓬萊曲』の最後の場面で、大魔王の立ち去った後△無念、無念、われなほ神ならず靈ならず、死ぬ可き定にうごめく塵の生命なほわれに纏える。』／事問はん、その「我」に、いましが／行く可きところいづこぞ？／世か、還るか、世に？／世に還らば、いづこに住みて、いかなる業をやなす？Vとして素雄を死なせる透谷の△根底Vにあるのは果して△原罪観Vであろうか。

さらに△牢獄Vの問題に関連してもうひとつだけ挙げておくと、わたしは、透谷の△牢獄Vの構造が最終的に決定されたのは、透谷がミナに対する△ラブの餓鬼道Vの中ではじめて真に△個人的の生命Vの問題に直面した時、というよりもっと正確に言えば、ミナの許から遁走してそこに帰還するまでの間の△心機妙変Vの境においてであると考えているが、このあたりに関しても△この『生そのもの』の危機から透谷を救ったのも美那子の愛とキリスト教であったV（『文学界』とその時代々上）とする笹淵氏の△文脈の正確な分析Vには疑わしい点がいくつかあるように思

われる。

第一に、△美那子はその教養、信仰においてそれまで透谷が接触した女性とは全く別人種であつた。自分の将来に自信を喪つてゐた透谷が大きな感動を受けたことは不思議ではない。それがやがて恋愛感情にまで発展した時、彼の過去の思想と行為に反省を生み、一挙に信仰に躍り入つたやうである▽というようなとらえ方では、△嬢は此ラブを以て一時の音楽の如くに面前を通過せしむるを得たり余は則ち然らず一度び会し一語を交る毎にラブの堅城愈固く遂に慘憺暗冥なる此一週間を迎ふるに至れり▽（『北村門太郎』一生中最も慘憺たる一週間、明・20・8）という文脈はとらえきれないのではないだろうか。

第二に、ここでの透谷とミナとの関係は、笹淵氏が△新婚の夢なほ円やかな時代▽に書かれたとする『楚囚之詩』の△彼は獄舎の中を狭しと思はず、／梁の上梁の下俯仰自由に羽を伸ばす、／能き友なりや、こは太陽に嫌はれし蝙蝠、／我無聊を訪来れり、獄舎の中を厭はず、／想ひ見る！此は我花嫁の化身ならずや／嗚呼約せし事望みし事は遂に来らず、／忌わしき形を仮りて、我を慕ひ来るとは！▽という一節の中により慘憺たる形で現われているが、これは△美那子の愛とキリスト教▽が透谷を救つたとする氏の見解にとって不利な材料ではないだろうか。なお『楚囚之詩』が△新婚の夢なほ円やかな時代▽に書かれたとする氏

の推測は、その印刷ができあがる約一週間前の日記の次のような記述を見るとときいささか甘すぎるように思われる。

余は実に過る二三年の間を混雜紛擾の間に送たり、愛情の爲め、財政上の爲め、或は病氣の爲め、是等の凡てが余をして何事をも成すことなく過ぐる二三年を費消せしめたり。……

実に余が眼前には一大時辰機あるなり、実に此時辰機が余をして一時一刻も安然として寢床に横らしめざるなり。嗚呼余が前後左右を見よ、驚く可き余の運命は萎縮したるにあらずや、自ら悟れよ、自ら慮れよ……独立の身事遂に如何んして可ならんとする？（明・22・4）

第三に、時間は前後するが、『父快藏宛書簡草稿』（明・20・8）の次の一節を見ても、氏の△文脈の正確な分析▽はいささか大まかすぎることにならないであろうか。

生は我が未だ狂せざるを怪むのみ白痴とならざるを奇とするのみ、蓋し此六月以来、生は自ら驚く程の耐忍力を以て此大敗軍に伴ひたる失望落胆を拒ぎたり、然れども此間に又た生を救ひたる援兵なきにしもあらざりし其援兵の第一は日常の遊戲なりし其第二は我が親愛なる石坂嬢にてありし、

此二者は能く生を助けて狂せしめざりし故に生は去る十七日までは泰然として毫も自ら恐怖せざりしも遂に生は僅に四日間にして落城したり……

生は実に此四日間に於て殆んど発狂せんとせり、恰も落城するに近かりし此は則ち彼の援兵の力を失ひけるに由れり既に遊戯の権を奪はれたり又た石坂嬢と交際を絶つ可しと決心したり此は則ち十六日の事にして十九日に至りては已に落城を告げんとせり(傍点原文)

△四日間△とは△一生中最も慘憺たる一週間△の前半であるが、ここでの葛藤の構造は△嗚呼人間精神の脆弱なる一に此に至るや、ラブの権勢の旺盛なる將た又た此に至らんとは△というところに要約されていると見ていいであろう。そうすると、すくなくとも△精神△の側から見れば、透谷を△危機△に陥れたのは自身の△ラブ△だということになり、△この危機から透谷を救ったのも美那子の愛とキリスト教であった△という命題は疑わしいものになりはしないだろうか。あるいは、そのような△精神△こそがすでに△危機△に陥っている△精神△なのであり、△ラブ△はそれを顕在化させたにすぎないというように、いわば高所からとらえた上でそう言っているのかとも考えてみるが、そう考えてみてもこの命題はなおさら成立し難くなるように思われる。

第四に、笹淵氏は△恋愛感情にまで発展した時、彼の過去の思想と行為に反省を生み、一挙に信仰に躍り入ったやうである△と述べているが、これも「父快藏宛」の次の記述を見ればいささか大まかにすぎるように思われるがどうだろうか。

生は石坂嬢と別るゝに当りて重要な誓言を約せり則ち人生の正路を取つて進む可き事はなり、……

生は斯くの如くにして勇猛にも我痴情に打勝ち又た我親友の心をも動かして二人の幸福を恢復し得たると同時に驚く可き洪水の如き勢力を以て神に感謝し神に帰依す可きを発悟せり余が斯くまで勇猛なる決心を成し得しは是れ神に捧ぐる献上物なり、イザ我れ眞の神の臣下となり神に忠義を尽くす可し

△恋愛感情△は持続していると言われればそれまでであるが、「慘憺たる一週間」にも△ラブ△の断念の決意を△良心を喚起して断行△した後△眞神の忠義なる臣下たらん事をも決意せり△とある以上、やはりこれは無視すべきではないであろう。

第五に、笹淵氏は、さきほど引いた△四日間△の部分の直前にある△過去の思想と行為△の△反省△文を引いて次のように述べているが、第三の問題と関連してこれにもや

はり疑問が感じられる。

透谷のキリスト教が他の「文学界」同人に較べて遙かに本質的であつたのは、それが思想問題や人生観の問題乃至は社会問題として——たとへば「己れの身を宗教上のキリストの如くに政治上に尽力」しようとするように——登場したのではなく、

生の一身は名譽と功業を成さんと思ふの心にて固まりたり、此心を外にせば生の魂は無一物なり、生の脳髓は死物にひとし、発狂するか白痴になるかの二にあらざるよりは、此心に離れて安穩なる生活を過ぐす事を得ざるべし、

といふ生そのものの危機において——それは単なる経済問題などではなく、人間存在の根本としての人格の問題として自覺されてゐる。——透谷に迫つたからである。このやうなキリスト教との出会ひにおいて、透谷はその半生の失敗が自己の傲慢と神に対する不信仰心に基づいてゐたことを自覺した。

疑問のひとつは、△生の一身は名譽と功業とを成さんと思ふの心にて固まりたり……▽というような透谷の△反省▽そのものに関するものであり、もうひとつは、こういう△反省▽文をそのまま受け取つてこれが△生そのものの危機▽だとし、また△傲慢不屈の不信仰（神に対して云

ふ）の致す所▽というような言葉をそのままカッコ抜きで自分の文章の中に取り入れる笹淵氏に関するものである。

△生の一身は名譽と功業とを成さんと思ふの心にて固まりたり▽というような△反省▽は、透谷の△信仰▽の度合いにちやうど見合つてはいるが、しかし△生そのものの危機▽はほんの表面しか掬われていない。透谷は外にも△神の信ず可きを知らざりし事▽と△人の愛を買ふの道を知らざりし事▽の二つから生じた△悪性▽だとして、△第一「不安心」 第二「功名心」 第三「凡欲」／第四「不経済」 第五「驕傲奢侈」 第六「不尊敬」／第七「無愛敬」 第八「社会を輕蔑せし事」／第九「飲酒癖」 第十「權謀心」／其他▽というように数え上げているが、このような平面でいくら△悪性▽を並べてみても△過去の思想と行為▽の核心にも△慘憺暗冥▽の深さにも決して達することはできないのである。そして、まさにこのような倫理的次元での△信仰▽と△反省▽によつて△慘憺暗冥▽を跨いだことが、△曾つて誤つて法を破り▽と書いた透谷自身の△誤▽りであるとわたしは考えている。

もつとも、今は△過去の思想と行為▽をこれから考察しようという段階であり、また、その考察を前提にしなければ△牢獄▽の重層構造は解明できないのであるから、これは今のところ△印象批評▽として受けとられてもやむを得ない、が、透谷が一生△傲慢不屈▽でありつづけたことだ

けはこれまで見てきたところからでも明らかであろう。

第六に、笹淵氏は△ラブ△の断念についても次のような△思想的把握△を行なっているが、これについても少し疑問を提出しておきたい。

透谷は自分の恋愛を「痴情」と呼び、「我れは曾つて人を救はんが為めには己れの生命をも犠牲に供せんと企てし事もありにき、況んや区々たる恋情をや」と述べてゐる。この恋愛に対する態度には、後年の恋愛観と対蹠的なものがあつて、まだ封建的、儒教的倫理観の影響が残つてゐると思はれる。これは明治初年のキリスト教に武士道の禁欲主義、非感覺主義を通じて受け容れられた面が大きいが、ただ透谷の場合は単に理性を重んじて感情を蔑視してゐるわけではなく、それを「神への献上物」「犠牲」と考えてゐるのであつて、これは信仰的立場からの恋愛否定である。尤もこの恋愛否定と信仰との論理的関係については、充分明瞭でないばかりでなく、自己犠牲を英雄的行為として自己陶醉に陥つてゐることも見逃せない。(だからこの決心は実行されないで終つたのである。)このように幼稚さを止めてゐるにしても、それが人間中心でなく神中心であり、禁欲的、実践的傾向をもつ点においてカルヴィニズム・ピューリタニズムの信仰型に属するものである。

笹淵氏にとって△恋愛否定と信仰との論理的関係△が△充分明瞭でない△のは、このような△思想的把握△の方法にわざわざいされて△論理的関係△以前の事実関係について誤認していることによると思われるが、その点については繰り返さない。それにしても、△この恋愛に対する態度には、後年の恋愛観と対蹠的なものがあつて△というように、△恋愛否定△から△後年の恋愛観△に跳び移つて、それぞれを△思想的△に理由づけてしまつたら、透谷に少し気の毒ではないだろうか。だいいち人は△恋愛観△によつて恋愛をしたりしなかったりするものではあるまい。それに△自己犠牲を英雄的行為として自己陶醉に陥つてい△と考える笹淵氏は、△人生何が故に苦痛あるか……曰く、欲^{パッション}なる魔物が、人生の中に存すればなり△(△明治文学管見△)や△人生に意味あるは即ち熱意あるが故なり。熱意あるが故に、執着あり。……人生に熱意あるは、即ち戯曲にトラゼヂある所以なり△(△熱意△)や△ミルトンはイムパッション^{イムパッション}を以て大詩人の一要素としたり。……情熱は虚思の反対なり、情熱は執なり放にあらず△(△情熱△)をどう読むのであろうか。これらの文章、というより△情熱△への執着をもミルトンやマッシュュー・アーノルドによつて説明するとしたら、それは△透谷のオリジナリティを発見する道△をみずから完全に断ち切つてしまふに等しいのである。

イムパツシヨンド

る。△情熱△の語は、透谷の場合には、マルクスの△Sinnlich sein ist leidend sein△(“ökonomisch-philosophische Manuskripte”)の意味あい、つまり受苦の意味あいを濃厚にもっているが、それは、透谷の△精神△が抽象的自由を必死に守ろうとしながらなお自身の△ラブ△の前に屈服せざるを得なかったという体験を踏まえたものでなくて一体なんであろうか。△後年の恋愛観△、つまり、△恋愛は人世の秘鑰なり、恋愛ありて後人生あり、恋愛を抽き去りたらむには人生何の色味かあらむ△で始まる〃厭世詩家と女性〃の△恋愛観△が同じ体験を踏まえたものであることは言うまでもないが、そこに現れているアンビヴァレンスでさえ、実は、すでに△慘憺暗冥なる一週間△における△精神△と△ラブ△の葛藤の形で先取りされているとわたしは考える。

透谷にとって恋愛はたしかに△人生の秘鑰△であった。

〃心機妙変を論ず〃の表現を借りれば、透谷はミナの許を去って後△棘然として顛倒△し、やがて△「死」彼に於て何の恐るゝところなく、生彼に於いて何の意味あるかを知らしめず、茫々たる天地、有にもなく無にもなきに似たる有様にありしもの△が、△始めて己れの存立の実なると天地万有の実なるとを覚知△する瞬間があったはずである。しかし、彼はこの瞬間を越えてもなお△人間中心△であって△神中心△ではなかった。つまり、現存の秩序に対する葛藤を基本的には以前と同じ形で維持しつづけた。すなわち、

△我痴情△を△神に捧げ△たと書いてからわずか十日位後に、透谷は△傲慢△にも次のようにして△吾等のラブ△を救い上げようとするのである。

拝啓君も御承知の如く日本人のラブの仕方は、実に都合の能き(御手前主義)訳に出来て居(れ)ります、彼等は情欲に由つてラブし情欲に由つて離るゝ者にしあれば、其手軽るき事御手玉^{ヲテダマ}を取るが如し、吾等のラブは情欲以外に立てり、心を愛し望みを愛す、吾等は彼等情欲ラブよりも最ソフト強きラブの力をもてり、……吾等は世に恐るべき敵なきラブの堅城を築きたり、道義の真理にも背かず、世間の俗風をも凌ぎ居る者なり、君よ請ふ生をラブせよ、(〃石坂ミナ宛書簡〃明・20・9・4)

つまり、透谷の△精神△は、△吾等のラブ△を△人間中心△の倫理的次元で武装して△世間の俗風△からみずから守ろうとしているのであり、△神△には結局なにひとつ捧げていないのである。そして、まさにそのことによって、以前は外的な関係であった△精神△と△世間の俗風△との葛藤が内的関係に転化し、△ラブの堅城△は△牢獄△と化するのである。言いかえれば、△痴情△というにせもの△犠牲△をつかまされた△神△は、ある時は透谷の内なる△日本人△として、またある時は△俗界の通弁△と化した

ミナの姿をとって、△ラブの堅城▽を内と外から攻略しつづけ、△傲慢不屈▽の透谷をついには死に致らしめなければやまないのである。

三

ところで、蘇峰論の前置きとしてはいささか脱線し過ぎた感があるが、△泰平の歌▽を歌う蘇峰との気の重いつきあいに入る前にも一言述べておきたい。それは、外ならぬ透谷の△牢獄▽の問題に關してであるが、わたしは、透谷の△精神▽がみずからは決して欲しなかつたにもかかわらず感性によっていわばパッシヴに受け容れさせられてしまったものとして、今のべた△ラブ▽の外に重要なものとしてもうひとつ△社界▽があり、これが△牢獄▽のいわば下部構造をなしていると考えている。言いかえれば、この二つが、主として透谷の△オリジナリティ▽の根源ともなりまた同時にその悔恨の根源ともなっていて、それが透谷の△地平線的思想に対する優越と承認という微妙な関係▽を規定していると思われる。たとえば、『蓬萊曲』において△自然に逆はぬを基▽とする△道術▽を説く鶴翁^{みちのじゆう}に対して△休めよ休めよ……▽と素雄に語らせた透谷が、『静思余録を読む』の中で『余裕』の中の△人の世に在る、未来なきより悲しきはなし……▽の部分だけを切り取ってあるように語っていることは、このような△牢獄▽の構造を

ふまえれば必ずしも理解できなくはないであろう。

勿論、透谷は自身の内部に居ついてしまった△社界▽を△社界▽に返すという方法は知らず、それがまたひとつの壁となって透谷に△牢獄▽を自身の痼疾のように引き受けさせているため、たとえば『二十年八月十八日ミナ宛書簡草稿』の回想などは、蘇峰から見れば、透谷を△厄したる者▽は結局透谷自身ではないかということになってしまうが、現在ではいわば状況証拠も物証も△思想史的把握▽の方法も蘇峰の時よりはるかにそろっており、透谷の△牢獄▽の社会的政治思想的意味を発見することは必ずしも不可能ではないはずである。しかし、それにしても△透谷は蘇峰の平民的、国民的立場の意義を認めながら▽ということを共通の前提として笹淵氏と平岡氏との間に論争が展開されるようないささか心許ない状況においては、もうひとつ手前の段階から出発しなければその意味を救い出すことは覺束ないように思われる。つまり、△いうまでもなくそれが民友社との間に論争をひき起した原因である▽というような断定に対して、それならば蘇峰は果して△社界的生活には冷淡▽ではなかつたかと一度問うてみる必要がある。もっとも、『余裕』や『非厭世』を見れば答はすでに明らかなような気もするが、しかし、『将来之日本』等の△平民的、国民的▽論説の場合には、△思想史的把握▽の方法が発達している今日では、同時代の国木田独歩のよ

うにハ夫れ平民主義の反対の標幟は則ち貴族主義なり。然れ雖、今日に在りて誰れありて吾こそは貴族主義なりと名乗り出づる者あらんや。故に標幟上已に平民主義の向ふ所敵なきなり、（『民友記者徳富猪一郎氏』明25・10）と単純明解に喝破してすますわけにもいかないであらう。（つづく）